

学術俯瞰講義

正義を問い直す

「アリストテレス：幸福と徳」

教養学部

山本芳久

アリストテレス：万学の祖・学問分類

理論的学

目的： 知識

対象：「常にそうであるところのもの」

- 『自然学』 (physika)
- 数学
- 『形而上学』（「存在するもの」を「存在するもの」というかぎりにおいて考察する）

実践的学

目的： 行為

対象：「たいていの場合そうであるところのもの」

- 『倫理学』 (ethika)
- 『政治学』 (politika)
- 第1巻3章（8-9頁）

制作的学

目的： 制作物

- 『詩学』
- 『弁論術』

中世におけるアリストテレスの受容

イスラム教

- イブン・シーナー (980-1037)
- イブン・ルシュド (1126—1198)

キリスト教

- アルベルトゥス・マグヌス (1200-1280)
- トマス・アキナス (1225-1274)

ユダヤ教

- モーセス・マイモニデス (1138-1204)

「この人〔アリストテレス〕は、自然における基準(regula)であり、質料的領域において人間の究極的な完全性を証明するために自然が見出した範型(exemplar)なのである、と私は信じている。」

(イブン・ルシュド『アリストテレス靈魂論大注解』Ⅲ, c.14)

cf. 山本芳久「イスラーム哲学：ラテン・キリスト教世界との交錯」、『西洋哲学史』第Ⅱ巻（講談社選書メチエ、2011年）

幸福論的倫理学と義務論的倫理学

幸福論的倫理学(eudaemonism)

- 人間の行為や存在の究極目的を幸福に置く。
- 幸福 εὐδαιμονία (eudaimonia)
- 目的 τέλος (telos)
- teleology 目的論
- 善 ἀγαθόν (agathon)

義務論的倫理学(deontology)

- δέον (deon)
that which is binding, needful, right, proper

カント(1724-1804)

義務「～しなければならない」
義務に基づいた行為
道徳法則に対する尊敬

哲学的概念の発生現場

目的 **τὸ οὐ ἕνεκα**
to hou heneka
that for the sake of which
「そのためのそれ」

本質 **τό τί ἦν εἶναι**
to ti en einai,
「それがそもそも何であったのかということ」

目的の連鎖（第1巻1-2章, 4-6頁）

勉強する

大学に入る

専門的な知識・技術を身につける

よい社会人になる

幸福になる

目的にも手段にもなる

善

善

善

目的にはなるが、手段にはならない。

最高善

「実現の順序」と「意図の順序」

実現の順序

勉強する



大学に入る



専門知の獲得



よい社会人になる



幸福になる

意図の順序

勉強する



大学に入る



専門知の獲得



よい社会人になる



幸福になる

三種類の生活類型

快樂的生活

- bios apolaustikos
- 快樂 = 幸福

社会的生活

- bios politikos
- 社会における自己実現 = 幸福

観想的生活

- bios theoretikos
- 真理の認識 = 幸福

「善(ἀγαθόν, bonum)」の多義性

道德的善

有用的善

快樂的善

トマス・アキナス 『神学大全』

「悪は、善の観点のもとにおいて(sub ratione boni)、すなわち、或る意味において善であり、そして端的に善であると把握されないかぎり、愛されることはない。……人間が不正を愛するのはこのような仕方において、すなわち、不正によって何らかの善—快樂または金銭または何かこうした類のもの—が獲得されるかぎりにおいてである。」 (I- II, q. 27, a. 1, ad 1)

sub 下に

ratio 観点・特徴・特質

bonum 善

カントによる伝統的倫理学の批判(1)

「学校で習う古くからの定式に、「われわれは善の観点のもとでなければなにものも欲求しないし、悪の観点のもとでなければなにものも忌避しない」(nihil appetimus, nisi sub ratione boni; nihil aversamus, nisi sub ratione mali)というのがある。この定式は、正しく用いられることも多いとはいえ、哲学にとってきわめて不都合な具合に用いられることもまた少なくない。というのも、この定式に用いられている善(boni)と悪(mali)という表現が二義性を含み、ラテン語がもつ制限のせいで、二重の意味をもつことができるからである。その結果、それらの表現は、実践的法則をどうしても曖昧なものたらしめることになる。」

(『実践理性批判』 A59-60)

カントによる伝統的倫理学の批判(2)

「ドイツ語は、幸いなことに、この違いを見過ごしたままにはしておかない表現を持っている。ラテンの人達が善bonumというただ一つの語で名指すものに対して、ドイツ語は、二つの極めて異なった概念把握の仕方と、それに見合った表現を持っている。即ち、bonumに対して善das Guteおよび幸das Wohl、malumに対しては悪das Böseおよび禍いdas Übel（もしくは不幸das Weh）という表現がある。我々がある行為について、その行為の善悪を考慮するか、それとも我々の幸不幸(禍い)を考慮するかということは、二つの全く別の価値評定となる。」

ラテン語とドイツ語の対比

ラテン語

Bonum
(善)

Malum
(悪)

das Gute
(善)

das Böse
(悪)

das Wohl
(幸)

das Weh
(禍)

ドイツ語

「倫理学」の語源（第2巻1章, 56頁）

習慣(ἔθος エトス)

• habit

性格・人柄(ἦθος エートス)

• character

性格の(ἠθικός エーティコス)

ethical, moral,
showing moral character

倫理学(τὰ ἠθικά
タ・エーティカ)

ἠθικόςの中性複数主格
(性格・人柄に関わる事柄)

どのような人柄を形成すれば、全体として幸福な人生をおくることができるかを考察する学問としての倫理学。そこで重視されるのが、「徳（アレテー）」という概念。

徳(ἀρετή)の定義：卓越性・力量

1. **goodness, excellence, of any kind, esp. of manly qualities, manhood, valour, prowess, Hom., Hdt. (like Lat. vir-tus, from vir).**

3. in Prose, generally, goodness, excellence in any art, Plat., etc.; **of animals or things**, Hdt., attic.

4. **in moral sense, goodness, virtue**, Plat., etc.:—also character for virtue, merit, Eur., etc.

枢要徳

賢慮(φρόνησις)

• 判断力

勇氣
(ἀνδρεία)

• 困難に立ち向かう「力」

節制
(σωφροσύνη)

• 欲望をコントロールする「力」

正義
(δικαιοσύνη)

他者や共同体を重んじる「力」

「有徳な人」と「悪徳の人」の相違

理性の支配

節制ある人

- 節制ある振る舞いに喜びを感じる。
- 葛藤がない。

抑制ある人

- 理性と欲望が葛藤しつつ、理性が打ち勝つ。

欲望の支配

抑制のない人

- アクラシア
- 理性と欲望が葛藤しつつ、欲望が打ち勝つ。

放埒な人

- アコラシア
- 欲望のままに振る舞い、後悔しない。
- 葛藤がない。

「健全な理性」の存在

「悪しき欲望」の存在

価値判断の相対性（第10巻5章, 469頁）

「同じものが、ある人たちを喜ばせる一方、他の人たちを苦しませ、あるいは、ある人たちに苦痛で嫌なものが、他の人たちには快いもの、愛されるものとなっている。こうしたことはまた、甘いものについても起こる。たとえば、熱のある人と、健康な人とでは、同じものが<甘い>と思われるわけではないからである。また、病弱な人と、良好な状態の人とでは、同じものが<熱い>と思われるわけでもないのである。」

価値判断の相対性の相対性（10巻5章, 469-470頁）

「これらすべての場合において、立派な人に現れているものが、実際にもそのとおりのものであると考えられる。そこで、もしこの立言が正しければ—正しいと思われるが—、そしてもし徳および、善き人であるかぎりの善き人こそ、それぞれの事柄の尺度であるとするれば、その時、善き人に現れている快樂が、実際にも快樂なのであり、善き人が喜びを覚える物事こそ、実際にも快いのである、ということになるだろう。」

「徳」と「技術」の類似性（第2巻1章, 58-59頁）

「技術」

「人は家を建てることによって建築家になり、豎琴を弾くことによって豎琴奏者になる。」

「上手に家を建てることから人は優れた建築家になり、下手に建てることから劣悪な建築家になる。」

「徳」

「正しいことを行おうことにより、我々は正しい人にならなければならない、節制あることを行おうことにより、節制ある人になり、また勇気あることを行おうことにより、勇気ある人になる。」

徳の形成のためには、徳ある人の行うような行為を繰り返し行うことが求められる。

「技術」が、その「技術」を体現している師匠との関係において初めて学ばれるように、「徳」もまた、その「徳」を体現している「徳ある人」をモデルにして初めて学ばれる。

基準としての「有徳者」（第3巻4章, 109頁）

「優れた人はそれぞれの物事を正しく判定し、それぞれの場面において彼にとっては、まさに真実が姿を現すのである。すなわち、それぞれの性格の状態には、それらに応じた固有の美しさや快さがあるが、優れた人というのは、それぞれの場面で真実を見て取ることにかけて、おそらく最も卓越しており、そのような人は、美しいものや快いものの、いわば基準であり尺度である、と言ってよいのである。」

普遍妥当的な「道徳法則」のようなものが行為の基準になるのではなく、それぞれの共同体における個別具体的な有徳者（フロニモス、賢慮ある人）が基準となる。

倫理学の諸理論の対比

功利主義

- 最大多数の最大幸福。
- 「行為」や「行為の規則」の生み出す結果としての善さや効用を重視する。

義務論

- 行為が普遍的な道徳法則に従っていることを重視する。
- 定言命法「同時に普遍的法則となることを意志しうるような格率に従ってのみ行為せよ」

徳倫理学

- 個々の行為というよりは、行為者の全体的な在り方や生き方を問題にする。
- 抽象的な法則ではなく、具体的な共同体の中における善き「人柄」の形成。

「生の技法・技術」としての哲学

「古代の哲学は、人類に、生の技法 (art of living) を提供した。対照的に、近代の哲学は、何よりも、専門家向けの専門用語の構築物のように見える」
(Pierre Hadot, *Philosophy as a Way of Life: Spiritual Exercises from Socrates to Foucault*, p.272)

アリストテレスと現代

Alasdair MacIntyre,
After Virtue (Third Edition),
University of Notre Dame Press,
2007.

Nancy Sherman,
*The Fabric of Character:
Aristotle's Theory of Virtue*
(Clarendon Paperbacks),
Oxford University Press, 1989.

Phronesis:
A Journal for Ancient Philosophy.
Edited by Verity Harte (Yale University)
and Christof Rapp
(Ludwig-Maximilians-Universität München).
Publisher: BRILL

参考文献

- アリストテレス『ニコマコス倫理学』 朴一功訳、京都大学学術出版会、2002年。
- 岩田靖夫『アリストテレスの倫理思想』 岩波書店、1985年。
- カント『実践理性批判（カント全集7）』 坂部恵・平田俊博・伊古田理訳、岩波書店、2000年。
- 中畑正志「アリストテレス」、内山勝利責任編集『哲学の歴史1 古代1』 所収、中央公論新社、2008年。
- H. G. Liddell, *An Intermediate Greek-English Lexicon: Founded upon the Seventh Edition of Liddell and Scott's Greek-English Lexicon*, Oxford : Oxford University Press, 1985.